



## Osaka Gakuin University Repository

Title	抄訳 テネシー・ウィリアムズ作『カミノ・リアル』（16場） <i>Camino Real (16 Blocks)</i> by Tennessee Williams
Author(s)	平松 良康 (Kazuyasu Hiramatsu)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 78 号 : 43-66
Issue Date	2019.12.31
Resource Type	Translation/ 翻訳
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

## 抄訳 テネシー・ウィリアムズ作 『カミノ・リアル』(16場)

平 松 良 康

ここに訳出したのは、A New Directions Book が1971年に刊行した *The Theatre of Tennessee Williams Volume II* 所載 “Camino Real” の序幕前半と第16場である。この二幕を選んだのは、ドン・キホーテやサンチョ・パンサが登場するのが全17場の中で序幕と終幕のみだからである。幕開き早々、サンチョは古い城壁都市カミノ・リアルの悪名高い独裁政治に恐れをなして故郷に逃げ帰り、一人市内に辿り着いたキホーテも終幕まで眠り続ける。芝居の大部分はキホーテの見る夢の様に、愛や死や絶望や希望に関する不可思議な象徴劇として、一連の山車行列の如く進行する。

カミノ・リアルでは、広場の涸れた噴水を中央にして高級ホテルと貧民街とが好対照をなし、ホテル経営者のガットマン（腸を抜く様に一切切を収奪する支配者）が秘密警察よろしき街路清掃員を操り、暴行・殺害を恣にして権勢を誇る。逗留する者は夢破れ傷ついた様々な時代の敗残者であり、誰もそこから抜け出す事が出来ない。カサノヴァや詩人のバイロンも登場し、往時の栄光に継ぐ富豪や有閑夫人、社交界の花形の零落が残酷に露呈し、儂く人生の舞台から消去されて行く。

主人公のアメリカ人キルロイはボクシングの元王者だが、心臓肥大の重症の為に天職の拳闘も夫婦の愛の交歓も禁じられ、「人生には生きる目的、或は、理由が全くない」（臼井、101）と感じ、故郷を捨ててこの地に流れて来る。キルロイは財布を掏られ、祭りの道化の役回りを強要され嘲弄を受けるが、ジプシーの娘エスメラルダに一縷の愛の望みを掛け、けれども不条理な状況に弄ば

れる。捕まり殺され解剖された上、純金の心臓を奪取されるすんでの所で、幽霊と化しながら必死にこれを取り戻す。然し、大切なその心臓をも仮初めの愛の故になげうち、彼は全てを無くする事になるのだが、目覚めたキホーテと共に不死鳥の如く、荒野に旅立つ決意を固める。

終幕の決め台詞「高山のスマレ、岩石を打ち砕けり！」は、夢やロマンスが決して実現せぬと知りつつ、それでも絶望に屈しない作者の悲願の叫びである。臼井氏はその主題を「ヨブ的テーマ、サタンのテーマ」(89)に分けて聖書と実存主義の哲学との考察に基づき、「ヨブの末裔は自らが置かれ」た「絶望的状态を」「認め、己に課された条件そのものに対する」「反逆に立ち上がる。」(134)と、核心を論じた。

換言すると、この芝居はキリスト教の最も重要な徳、信・望・愛に関するアメリカ版ヨブの反問の表白である。悪しか存在せぬ様に見える場所に如何に善を見出し、絶望して当然の場合に如何に希望を抱き続け、愛の救済の至難にも拘らず如何にそれを信じ得るか。一見道化の如きキホーテの不撓不屈の西洋精神を幻想的かつ猥雑に描き出した、これはウィリアムズ一流の信仰の美しい祈りなのである。現実家が過酷な現実の前に全く無力であり、理想に邁進出来るのが虚構の老爺と幽霊とのみである、この結末は作者の峻厳な現実認識を反映して居る。

『カミノ・リアル』初演の1953年は、実に興味深い年だ。アイゼンハワーが大統領になり、ダレス国務長官が対ソ連「巻き返し政策」を打ち出す。スターリンが亡くなりマレンコフが後任となり、東ドイツでは反ソ連デモ・暴動が発生し激化する。ソ連が水爆実験に成功し、フルシチョフが権力を掌握する。アメリカ国内ではスパイに対する「マッカーシズム」の赤狩りが起こる。この戯曲冒頭のダンテ地獄篇の引用句、「人生の道の半ばで 正道を踏み」外し「目をさました時は暗い森の中に」居た(平川訳、8)と、その様な不安と恐れを周章者なら痛感させられた時代かも知れない。何しろハムレットが嘆くこの世の「関節のはづれた世界」、ハート・クレインの「毀れた世界」(臼井、133)、

まさに地獄の口に立つかの様な暗い世相である。当然、この政治状況の閉塞感  
は、独裁者ガットマンや非道な街路清掃員の創作に影響を及ぼしたに相違ない。

けれども、より深く内省的で本質に拘泥するテネシー・ウィリアムズは、神  
に「有罪判決を受けた罪人であること」を常に自覚して居た(市川、141)。  
「いつも挫折感、虚脱感、喪失感、価値の不明にさいなまれて」居たにせよ、  
同時に「あらまほしき姿を自ら」徹底的に追求した「ロマンティック・マイン  
ドの作家」(市川、173)である事も忘れてはならない。臼井氏の評言を借りれ  
ば、「芸術の社会的道徳的使命」を信じたウィリアムズの作品に於ては、「反俗  
思想と形而上学的反抗が不可分に結びついて」(109)居る。即ち、ウィリアム  
ズの創作の鍵は、外界のどれほど不穏な政治情勢にも慌てず騒がず、内面の最  
悪の自己憐憫にも決して溺れず、不幸のどん底にも恐るべき死にも、ユーモア  
の感覚を武器にして努めて平静に臨み、そこから反転して最高の美と道義の理  
想に近付かんと奮起する、すぐれて求道的な生の悪戦苦闘に他ならない。

彼の希望の象徴的人格たるドン・キホーテは、西洋精神の危殆に瀕する時、  
幾度も復活を果す。かかる不死鳥の精神の足跡を看過してはなるまい。十二年  
後、ミュージカル『ラ・マンチャの男』が上演せられ、特に理想に邁進する孤  
高の魂の賛歌とも称すべき「見果てぬ夢」(実現不可能な夢)の曲は、未だに  
アメリカ人を魅了して已まない。そのまた十七年後、G・グリーンはスペイン  
を舞台にして、現代版の遍歴譚『キホーテ神父』を上梓した。この芝居と同じ  
く独裁政治下に於いて、神への反問は深刻な懐疑の弁証法を展開し、やはり同  
様にユーモアを武器にして、絶望的な苦闘が最後まで続くのである。

『カミノ・リアル』には既訳が二つある。中田耕治訳の10場は、この芝居の  
原案だが別物であり、ドン・キホーテの出番が更に少なく、人物描写も貧弱  
だ。16場の大庭みな子訳は、訳了後までその存在を知らず未見だが、全集所  
載のエッセイから訳者の動機と意図が読み取れる。まだ無名の訳者の、アラス  
カ滞在の鬱屈、作家たる強固な自負、自由の解放感への共感と憧れが語られ  
る。私の印象では、訳者が作品を自分に引き寄せ過ぎて居ると感じた。「もう

一人の自分」(273) との邂逅を喜び、この芝居を「ほとんど自己に重ねて」「自分自身の言葉」(274) に置換したと告白するのである。「この作品の翻訳は全く私自身の青春の手がかり」(274) だと述べるのだから、作家大庭みな子の原点としての意義はある。

だが、既述の通り、ドン・キホーテに着目したこの抄訳の意図は、欧米人が限りなく絶望に接近した際に示す、彼等の宗教的な伝統に根差した、神への執拗な反問の雄々しさと、その先にある徹底的な自己放擲の潔さに瞠目する事にある。ドン・キホーテの生き方に自己実現を見るのと、自己放擲を認めるのでは、関心の方向が全く逆なのである。

#### 【引用・参考文献】

- アリギエーリ、ダンテ『神曲 地獄篇』平川祐弘訳、(河出文庫、2009年)。  
 市川節子『ぼくがイグアナだったこと』南雲堂、2001年。  
 ウィリアムズ、テネシー「カミノ・リアル」『テネシー・ウィリアムズ 一幕劇集』中田耕治訳、(早川書房、1980年)。  
 臼井善隆『文学と政治・キリスト教』近代文藝社、2014年。  
 大庭みな子『「カミノ・リアル」—テネシー・ウィリアムズ』『大庭みな子全集 第十巻』講談社、1991年、272-276頁。

### テネシー・ウィリアムズ 『カミノ・リアル』(16場)

(『王の道』)

#### 序幕

幕が上がると、殆ど照明の無い舞台上に、風のやかましい音が聞こえ、どんどんと打ち付ける寄せ波か遠くの砲撃の音の様な微かな反響が伴奏を奏でる。セットの背景をなす古代城壁と、その壁の上に見える山々の周辺との遙か上方には、白い発光のゆらめきがあり、夜明けが、あたかも網に捕まり飛び立つ為

にもがいて居る白い鳥であるかの様である。

この光の中に広場が断続的に見える。それは熱帯の港町のもので、混乱させる様な、けれどもともかく調和の取れた類似点があるのは、広く点在するタンジール、ハバナ、ベラクルス、カサブランカ、上海、ニューオーリンズの様な港湾都市である。

舞台上手には、その通りの豪華な区画があり、シエタ・マレス・ホテルの正面と低いテラス席が見え、テラスの上には幾つかガラス天板の白いスチール・テーブルとイスが並ぶ。下の階に大きな出窓が一つあり、窓の中には一組の上品なマネキンが見え、一人は腰かけ、もう一人は後に立ち、彩色された笑顔で外の広場の方を見て居る。上の階には小さなバルコニーがあり、その後方、城壁に向いた大きな窓に、シルク地に描かれた不死鳥のカーテンが掛けてある。この不死鳥は劇中時々、柔らかく照らされた方がよい、復活こそがまさにその意味の一つなのだから。

このホテルの反対側にはスラム街が広がり、ジプシーのけばけばしい小店、質入れされた様々な品を並べた窓のある高利貸しの事務所、それにリッツ・メン・オンリーがある。これは安ホテルか木賃宿と呼べる建物で、その一階玄関の上には実用窓が見え、入口からは時々、浮浪者が現れて、適切な或は対位法の歌の題名を伝令する。

舞台奥は、古代の城壁に登る大階段になり、一種のアーチ道に通じ、外の「テラ・インコグニータ」へと続いて行く。劇中で語られる所の、城壁都市と雪を冠した山々の遙かな周辺との間に広がる荒野である。

舞台前面の上手にも下手にも、一對のアーチ門があるが、袋小路の通りに入

るばかりである。

幕が上がると直後に、劇場の中央通路に一筋の青い照明が当てられる。そして、この光が建物の後方から前に進んで来る中を、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ登場。老いた「トビネズミ」の様な格好である。彼は通路に入るや、嘎れた老人の声で「オーラ！」と叫ぶ。それはまだ生気に満ち溢れて居るが、これに応じたもう一人の声は苛立ち、疲れ果てて居る。彼の従者、サンチョ・パンサである。肉体的なものに過ぎない疲労からよるめきながらも老騎士は通路を進み、サンチョが2、3メートル後に続く。中世の盾から軍用食器入れや魔法瓶に至るまで、大量の備品を持たされて居る。主従の間で、大声の会話が交される。

キホーテ [風にもかき消されず、殆ど老人らしい声でがなり立てて]:  
青は遠き道のりの色!

サンチョ [彼の後でうんざりして]:  
はい、道のりに青ざめて。

キホーテ: 青は気高さの色でもある。

サンチョ: はい、気高さは青くさい。

キホーテ: 青は遥かな道のりと気高さの色だ、だからこそ老いた騎士は身辺のどこかに、常に青いリボンの切れ端を付けるべきなのだ……

[彼は疲労困憊してふらつき、通路席の客の肘を突く。謝罪の言葉をぶつぶつ呟く。]

サンチョ: はい、青いリボンの切れ端。

キホーテ: 色あせた青いリボンの切れ端、何であれ甲冑の名残りの物に隠されたり、槍の先端に付けられたり、騎士の一不屈の槍だ! それこそ老

騎士に想起させるのに役に立つ、遙かに来し方と遙けき行く末との道のりを・・・

[錆びた鎧の備品を幾つか通路に落として、サンチョは排泄物に相当するスペイン語を呟く。]

[キホーテは今や前舞台への踏み段の下に到達する。彼はそこで立ち止まる、あたかも夢への入場・夢からの退場に当て所なくぶらついて居るかの様に。サンチョが彼の後でガチャガチャ鳴らしながら、引張り上げる。]

[ガットマン氏が、尊大な肥満体に亜麻のスーツとソラの髓で編んだ日除け帽を着用して、シエタ・マレスのバルコニーにぼんやりと現れる。手首には白いオウムを乗せて居る。その鳥が荒々しく鳴き立てる。]

ガットマン：シーツ、オーロラや。

キホーテ：そして又、老騎士に想起せしめるのは、その暮したる緑の故郷、心の青年時代たりし田舎よ、この様な誓約を高吟するより前の、絶対の真理とか！

サンチョ [息を切らして]：一真理。

キホーテ：勇気！

サンチョ：一勇気。

キホーテ [槍を掲げて]：本分！

サンチョ：本分・・・

キホーテ：—それが大した老修道僧の無意味なぶつくさになり果てた、夕食の冷めた羊肉に背中を丸めて執着する有様！



[ガットマンが広場の二人の警備兵に警戒させる。彼等は赤いランタンを持ち横断して、前舞台の両側に着く。そこで二人は白と黒の縞模様の防護遮断機を下げる、まるでその前舞台が前線を示して居るかの様だ。その一人がピストルのつり革に手を置き、踏み段の上の二人連れに歩み寄る。]

警備兵： ヴィエン アキ。（ここに来い。）

[サンチョは尻込みするが、キホーテは昂然と防護遮断機にすたすた近付く。この警備兵は彼の陰気な、甚だ生真面目な赤ら顔に懐中電灯を向け、武器を隠して居ないか、投げやりに「身体検査」を実施し、錆びた古い小刀を調べ、小馬鹿にした様にそれを投げ捨てる。]

警備兵： スス パピレス！ スス ドキュメントス！（お前達の書類は！文書は！）

[キホーテは帽子の裏地から何かボロボロの古い紙きれを不器用に取り出して見せる。]

ガットマン： 誰だ？

警備兵： キホーテと名乗る年寄りの砂漠ネズミです。

ガットマン： おお！—お待ちして居た！—通せ。

[警備兵達は遮断機を上げて、一人がテラスの上で喫煙する為に腰を下ろす。サンチョはまだ後ずさりする。前舞台の上と通路への踏み段との間で、口論が生じる。]

キホーテ：進め！

サンチョ：おお、嫌です。ここの事なら承知してる。[皺だらけの羊皮紙を取り出す。] 地図にありまさあ。ほら、ここに書いてある、「歩み続ければ、城壁の町の広場に到る。カミノ・リアル（王の道）の終点にして起点なり。そこにて立ち止まるべし。」その続きは、「旅人よ、引き返せ、この地にては人間らしさの泉の干上がりたるが故なり—」

キホーテ [その地図をサンチョから掴み取り、残りの文字を読む。]：一かの国に一羽の鳥も見ず、野鳥は悉く人に馴らされ、飼育せらるるのみ— [彼は地図を鼻先に近付ける。] 一籠の中にて！

サンチョ [しつこくせがんで]：いざラ・マンチャに帰らん、ね、ね？

キホーテ：進め！

サンチョ：今が引き時ですよ！

キホーテ：引き時など断じてない！

サンチョ：俺アラ・マンチャに戻ります！ [彼は騎士の装備をオーケストラ・ピットにまとめて放り出す。]

キホーテ：拙者を見捨ててか？

サンチョ [通路の後方へ大急ぎで]：見捨ててでも一緒でも、疲れ知らずの、疲れさせる旦那様よ！

キホーテ [懇願する様に]：サーン チョー！

サンチョ [通路の端近くで]：ラ・マーン チャー・・・に俺あ戻ります。

[通路の青い光が薄れて行くにつれ、サンチョは姿を消す。警備兵は煙草に火をつけ、広場からぶらぶら出て行く。風がうめき、その大昔の騎士が佻しい風情で広場に入場すると、ガットマンは静かに嘲笑する。]

キホーテ [広場を見渡し]：孤独だ・・・

[驚いた事には、その言葉が、町の大階段の下や城壁に面して体を寄せて群がる殆ど目につかぬ人物達により、優しく木霊する。キホーテは自分の槍に寄り掛かり、苦笑しながら見守る。]

一見た目の孤独の数だけ孤独な者が居るのに、手助け無用の平氣の平左が孤独であるなどとは、許し難い身勝手だな。

[彼は埃まみれの毛布をよくはたく。影の様にぼんやりした沢山の腕が彼の方に伸びて来て、多くの声が囁く。]

声： 眠れ。眠れ。眠れ。

キホーテ [毛布を準備しながら]：ああ、左様、しばらく寝るとしよう、この町の壁に直面して少しばかり眠り、夢でも見るとするか・・・

[マンドリンかギターが「フランスのナイチンゲール」の曲を演奏する。]

一我が夢は奇跡の劇の移動舞台、仮面劇の行列となり、昔の意義が想起せられ、恐らく新たな意義が見出されよう、そしてこの眠りから、この心かき乱す仮装行列の夢から覚めた時、その影の中から一人を選び、サンチョの代りに拙者の供をさせるとしよう・・・

[指の間で手鼻をかみ、シャツのすそで拭き取る。]

一何となれば、新しい連れは古い連れほど親しくないものだが、結

局は同じ事—顔かたちがほんの少々異なるばかり、それが進歩向上なのかどうか解らぬが、ともあれ昔の連れのままなのだ、それに拙者が一人で平気なのに孤独だなどとは、我儘に過ぎよう・・・

[彼は大階段の下にある窪みへの勾配で蹠く。その窪みにホームレスの大半が開いた小店の日除けの下、群がり身を縮めて居る。]

[白いオウムがやかましく鳴く。]

ガットマン：シーツ、オーロラ。

キホーテ：明日の丁度同じ時刻、我らはマドルガーダと呼んで居る、アルバなる単語を除いて全ての言葉の中で最も魅力的な言葉なのだ、その言葉には夜明けの意味もある—

—左様、明日の夜明けに、拙者は新たな連れを供にしてここから出立する積りだ、それにこの古びた青いリボンの切れ端が、道のりを拙者の心に刻ませる、来し方と今後の行く末との、して又、拙者の心に留めさせるのだ—

[オウムが激しく鳴く。]

[キホーテは騒々しい鳴き声に同意するかの様に頷き、大階段の下で彼の毛布の中に体を包み込む。]

ガットマン [オウムのトサカを撫でながら]：おとなしくしろ、オーロラ。うむ、朝が明けたな、オーロラ。

[夜明けが広場を銀色に染め、徐々に金色に変化してゆく。商店の

白い日除けの下で、物売りが起き上がる。ジブシーの小店が開く。ガットマンが話して居る時に、中年も後半の背の高い、上品な名士（ジャック・カサノヴァ）がポケットから銀の嗅ぎ煙草入れを取り出しながら、シエタ・マレスから高利貸し店の方へ横切る。（恐らくドン・キホーテを除いて）この芝居に登場する伝説の人物達は皆、一般に「現代的」だが、実際に関係する時代の痕跡をいささか留めて居る。カサノヴァの場合、彼のステッキと嗅ぎ煙草入れ、事によると錦織りのベストが、この歴史に基づく暗示を示すのに十分かも知れない。彼はタカのような頭を持ち、大抵一種の不安な驕りを見せる。着実に激しくなる圧迫の下で保たれて居る驕りである。]

一朝になり、朝が過ぎます。午後です、ハハハ。さて、階下に降りてあの老いた放浪者の夢の始まりを告知しなければいけません・・・

(以下省略)

## 第16場

キルロイ [前に飛び出し] :

それは僕のものだ、この野郎！

[彼は医学の教官からその金色の球体を奪取する。検死は台の上の照明が徐々に暗くなるにつれて、何事も無いかの如くに進行する。だが、キルロイには、幽霊としての逃走劇が始まる。第6場の終りに生じた追跡の幻想的な再上演である。ガットマンがバルコニーから叫ぶ。]

ガットマン：止まれ、泥棒！止まれ、亡骸！その金の心臓は国家の財産だぞ！

奴を逮捕しろ、純金の心の強盗犯を！

[キルロイは舞台袖を疾走し、劇場通路に降りる。警報の悲しい音が聞こえる。その場の雰囲気は呼び声や笛の合図、エンジンの轟音やブレーキの甲高い音、ピストルの発砲音や雷鳴の様に響く足音で満ち溢れる。客席の薄暗さはサーチライトの数条の光線に切り裂かれるが、追跡者はどこにも見当たらない。]

キルロイ [息を切らして通路を走りながら]：

これは僕の心臓だ！どこの国の物でもない、アメリカの物ですらない。出口はどこだ。長距離バスの停留所はどこに？誰にも、僕の心臓を博物館のビン詰め展示にして入場料を取らせたりはさせない、腐敗した警察の支援なんかに協力するものか。あいつらどこに居やがる。どちらに進んで居るか、いや、どちらから来るのか？ねえ、誰か、僕を助けて、ここから出して下さい。どの方向に僕は、どうしよう、どちらに、僕は行くぞ、行くぞ、行くぞ、行くぞ！

[漸く彼はバルコニーの中に辿り着く。]

畜生、迷子だ！どこに居るのか、解りやしない。ぐるぐる堂々巡りだ、混乱して居る。訳が解らないや、何が、起きたのか、まるで、夢みたい。まさに悪夢だ、……… マリア様、ああ、マリア様、マリア様！

[第2場で跳び上がる足場にした箱の中に這入る。]

[明るい一筋の光が彼の上に注ぐ。彼はその光を見上げて泣き叫

ぶ。]

マリア様、キリスト教徒が御保護によりすがり、御助けを求めます、マリア様！悪い夢みたいだ・・・

[エスメラルダが子供染みた寝巻を着て、ジプシーの店の屋根の上に、薄織物のテントの張られたベッドの傍らに現れる。彼女の母親も甘く囁きながら、鎮静剤入りの飲み物を持ち登場。]

ジプシー：おねんね、おねんねおし、いい娘だね。お休みの時間よ、南も北も、東も西もね。

キルロイ [優しく]：

いやはや全く、夢、みたいだ・・・

[喘いで彼は、箱の棚から身を乗り出す。自分の心臓をアメリカンフットボールの様に抱きながら、エスメラルダを見つめる。]

ジプシー：大麦の栄養ドリンクをお飲み、可愛い子や、そしたら眠りの精が忍び足で訪ねて来るさ、いろんな夢で一杯の袋を下げて。

エスメラルダ：お母さん、私は選ばれた英雄の夢が見たい。

ジプシー：どいつだい、これから来る男か、これまでに済んだ男か。

エスメラルダ：唯一の人、キルロイよ！彼は誠実だもの。

キルロイ：その通り。かつては、しばらくの間は。

ジプシー：どうしてキルロイが誠実だと解るかね？

エスメラルダ：あの人自身の言葉から。

キルロイ：真実だ、かつては本当に。

ジプシー：それをあいつは何時？

エスメラルダ：私のベールを上げた時に。

ジブシー：ねんねだね、男どもはお前のベールを上げる時には、いつでも誠実なんだよ。自然な条件反射の一つで、何か意味のある事では全然ない。

キルロイ [傍白]：ジブシーの御袋は、何てひねくれた嫌な婆あだ！

ジブシー：それにお前の為のお祭りは、他にもこれからまだ沢山あるさ、小さなお人形さん、他にも沢山の選ばれた英雄がお前の小さなベールを上げる事になる、母さんとばあやが部屋を空けて居るすきに。

エスメラルダ：嫌だ、お母さん、絶対に、本気よ。

キルロイ：あの娘は本気だ、僕は信じる。

ジブシー：大麦の栄養剤を早く飲み干して、床に就く時のお祈りをおし。

[エスメラルダはその飲み物をすすり、母にコップを手渡す。]

キルロイ [彼の声は途切れがちになり]：

僕には一人の真実の女性が居た、その人の所へは戻れないけれど、でも、もう一人の女性を今見つけた。

[箱から舞台の上に跳び下りる。]

エスメラルダ [跪いて]：

今、私は眠りにつき、主よ、私の魂をみ手に委ねます。目覚める前に臨終の苦しみがありますなら、主よ、私の魂をみ元にお召し下さい。

ジブシー：神の祝福が母さんの上にあります様に。

エスメラルダ：そして水晶と紅茶の茶葉の上にあります様に。

キルロイ：あのう・・・



エスメラルダ：今のは？

ジブシー：広場の雄猫だよ。

エスメラルダ：今夜、広場で寝床の無い全ての猫にも、神様の祝福があります様に。

キルロイ：アーメン！

[人影のない広場で、彼は跪く。]

エスメラルダ：神様の祝福が全ての人の上に、通りで自分の心呼び売りする詐欺師、ペテン師、強引な露天商にも、再犯の恐れのある前科者や、愛の過ちを犯した高級娼婦や、嫉妬の一番長い角で飾られた恋人達のうちでも最も立派な人や、心に秘めた緑の田舎から遠くまで放浪したけれど、帰り道を見つける事が或は出来るかも知れないし、どうしても出来ないかも知れない詩人にも、祝福があります様に、今夜天から微笑を浮かべて、最後の伊達男の紳士や、さびた甲冑と汚れた白い翼を持つ人々を御覧になり、一致とほとんど哀れみと呼べる様な慰めを以て、あの消えゆく伝説的人物たち、曖昧に憶えられた歌の様にこの広場に現れては消え去る人々を、顧みてください、ああ、いつの日かどこかで、再び栄光なる言葉の意味する所が実在します様に！

キホーテ [嘎れた大声を出し、ノミだらけの自分のボロ切れの中で少し揺れ動いて]：

アーメン！

キルロイ：アーメン・・・

ジブシー [不安になり]：一さあ、もう十分。

エスメラルダ：そして、ああ、神様、今晚私にあの選ばれた英雄の夢を見させ

て下さい！

ジブシー：さあさあ、お眠り。夢の魔法の絨毯で飛んでお行き。

[エスメラルダは薄織物のテントの張られた簡易ベッドにそろそろ入る。ジブシーは屋根から下りる。]

キルロイ：エスメラルダ！僕の愛しいジブシーの彼女！

エスメラルダ [寝ぼけて]：シッシッ、猫め。

[薄織物の後の明りが段々ぼんやりして来る。]

キルロイ：猫ではない。大きな祭りで選ばれた英雄、キルロイだよ、金のグローブを持つチャンピオンだ、僕の黄金の心臓は胸から切り取られたけど、お前に捧げる為にここに両手に抱いて居るよ！

エスメラルダ：シッシッ。選ばれた英雄の夢を見させて。

キルロイ：ええい、面倒臭い！猫と誤解された。どうすればいいかな、この可愛い娘に本物だと納得させるには？

[三つの真鍮の玉が鮮やかに点滅する。]

——取引をもう一つ、示して居るらしい！

[彼は高利貸しの店に飛び込む。すぐに入口に照明が灯る。]

僕の心臓は純金だ！これと何を交換してくれる？

[宝石、毛皮、スパンコールのガウンなどが、彼の足下に投げ出さ

れる。彼は高利貸しに、バスケットボールをパスする様に、自分の心臓を投げて、その戦利品を引摺むとジプシーの店に急いで戻る。]

可愛い人！この贈り物を見てごらん！僕の金の心臓と交換したんだよ！

エスメラルダ：シッシッ、猫・・・

[彼女は寝入る。キルロイは拳で額を打ち、それからジプシーの店の扉に突進して、両方の拳で戸をドンドン連打する。扉が急に開け放たれ、大きな瓶の中身の糞尿が彼目がけて投げかけられる。息のみ、口から吐き出し、嘔吐を催しつつ彼は後退する。逃げ戻ると、最後には大げさな絶望の身振りをする。]

キルロイ：ひどいオチだ！カミノ・リアルで、気をもんでお手上げになり、コテンパンに打ちのめされた！挙句の果てに、便つぼの中身で洗礼を受けるとは！——こんな仕打ちはむごい、と誰か弁護してくれたかなあ？！

[キホーテがスラム街の壁に対してピクリと身動きする。咳をして痰つばを吐き、よろよろと立ち上がる。]

ガットマン：おや、あの老いぼれ騎士が目覚めた、やつの夢はもう済んだのに！

キホーテ [キルロイに]：もし、あれは噴水かね？

キルロイ：——ええ、でも——

キホーテ：口中に忌々しい鶏の羽根がな ……

[彼が泉に近付く。泉が流れ出す。キルロイは驚いて後ずさりする、その老騎士は口を漱ぎ、水を飲み、それから水浴びをする為に上着を脱いで、ぼろぼろの衣類をキルロイに渡す。]

キホーテ [水浴びしながら]：ケ・パサ、ミ・アミーゴ？（我が友よ、どうなされた？）

キルロイ：こんな仕打ちはあんまりだと。解りますか、僕の主張？

キホーテ：やつがれ以上に誰がよく解り得ようか、何たるひどい仕打ちかに就いて陳べるのなら。

[彼は歯ブラシを取り出し、歯を磨く。]

——忠告を授けて進ぜようか？

キルロイ：おいおい、カミノのこのどん詰まりで、頂けるならどんなものでも有難く頂戴しますよ！

キホーテ：断じて！ 憐れむなかれ！ 汝！ 自身を！

[彼は手鏡を取り出し、自分の顎鬚と口髭を手入れする。]

自惚れの傷や、我らの自我が忍耐せねばならぬ数多の侮蔑はな、古びる肉体と疲労困憊する精神に収められて居て、寛大な笑みを以て受け入れられるのがより良き方策なのだ——こんな風に！——お解りか？

[途方もない満面の笑みを浮かべ、莞爾として顔を二分して見せる。]

ガットマン：あの老いた騎士の顔に、スポットライト！

キホーテ：さもなくば、貴公がなり下がるのは、凝固クリームで満たされた袋なのだ、一所謂レチェ・マラ（傷んだミルク）よ—誰もそそられず、何より貴公自身が好みはすまい。

[櫛と手鏡とをキルロイに手渡す。]

お手前には何か計画がおありかな？

キルロイ [一寸自信が持てず、物欲し気に]：ええ、計画して居たのは——進み続ける事——ここから！

キホーテ：結構！みどもと同行しなされ。

キルロイ [観客に対して]：いかれた年寄りのロクデナシだね。

[そしてこの騎士に]

ドンデ？（どこに？）

キホーテ [階段の方に進み始めて]：キュイエン・サベ！（誰にも解りはしない！）

[泉は今も騒々しく気持ちよく流れて居る。浮浪者達が驚嘆して囁きつつ、そちらへと移動してゆく。マルゲリートがテラスに出て来る。]

キルロイ：おーい、出たぞー！

キホーテ：静かに！お聴きなさい！

[二人は階段の上で立ち止まる。]

マルゲリート：アブドラー！

[ガットマンがテラスに降りて来る。]

ガットマン：マドモアゼル、お客様の為に私にその言伝をさせて下さい。この壮麗な見もの大団円に少しは私も参加致しませんと、失礼に当りますので。

[広場を横切り反対側の正面に行き、木賃宿『リッツ・メン・オンリー』の窓の下で「カサノヴァ！」と叫ぶ。]

[その間に、キルロイが古代城壁の落書きの「キルロイ参上」の動詞「参上」を消して「北上」の訂正を大文字で書く。]

カサノヴァ！素晴しき愛人にしてカミノ・リアルの寝取られ男の王様！貴方の最後の御婦人が費用を保証して下さり、テラスで朝食を共にしようとお待ちでございます！

[カサノヴァは最初、安宿の実用窓から顔を出し、次いでその薄汚れた戸口から現れる。やつれて、髭も剃らず、しわだらけの衣服を身につけて居るが、これまでと同様、背筋を伸ばし良い姿勢を維持して居る。彼はまばたきをして、朝日のまばゆい光を荒々しく睨みつける。]

[マルゲリートは彼に視線を返す事が出来ない。苦悶と呼んでも決して強すぎる表現ではない様子で、彼女は顔をそむける。しかし、同時に彼の方に哀訴の手を差し延べる。少し躊躇してからカサノ

ヴァは彼女の方に歩み始める、彼のステッキで規則正しく拍子を刻み舗道を打ちながら。横切る際に一度、苦笑を浮かべて観客の方をちらりと見やるのだが、そのゆがめた顔は、現在のカサノヴァよりも遥かに自惚れた見栄坊でも当惑させる体のものだと、白状して居る。彼がマルゲリートに近付くと、彼女は手探りで彼の手を探し、弱い叫び声をあげてそれを握り、発作的に自分の唇に押し当てる。一方、彼は彼女を両腕の中に引き寄せ、すすり泣いて居る彼女の金髪に染めた頭の上方に、落ち着いた暗い視線を送る。瀕死の病人の、その痛みの上にかけた麻酔が運よく効いて居る体の凝視である。]

[キホーテは型通りの所作で槍を持ち上げ、階段からかすれ声で力強く叫ぶ。]

キホーテ：高山のスマレ、岩石を打ち砕けり！

[キホーテはキルロイと共にアーチ型の門を通り抜けて行く。]

ガットマン [観客に対して]：幕切れの台詞が決まりました！

[両袖に向けて]：幕を下ろせ！

[肥満の男特有の優雅なお辞儀をする、丁度——]

[幕]

## *Camino Real (16 Blocks)* by Tennessee Williams

Kazuyasu Hiramatsu

Don Quixote and Sancho Panza appear and play important roles in the prologue and the last block 16 of this fantastic play *Camino Real*. I've been interested in their idealism and realism in English literature. That is why I translated into Japanese the first half of the prologue and the epilogue, where Sancho leaves his master to go home and Quixote keeps sleeping almost to the end and eventually starts for the unknown world with his new squire. This is mostly the fool's dream like a series of odd masquerades, or a symbolic drama about love, death, despair and hope.

The hero Kilroy has no aim or reason to live for. He is persistently tormented by the dictator Gutman and the horrible streetcleaners like secret police. Concerning the social background, this play was first performed in New York in 1953, when the Cold War escalated because Soviet Russia succeeded in conducting an H-bomb test while in the United States McCarthyism became more severe. The audience perhaps felt themselves "in a dark wood where the straight way was lost" from Dante's *Inferno*. Tennessee Williams used the famous phrase as an epigraph for this play. The author seems to make Kilroy lament just like Hamlet that time is out of joint. A certain critic thought the theme of *Camino Real* as Job's reproving and Satan's rising against God. Where there seems to be no virtue, how could a person keep the faith and find hope and love without



self-pity?

According to another critic, Tennessee Williams was “a playwright with romantic mind” who pursued what he would have been, although he was always keenly realizing a sense of frustration, vanity, loss and meaninglessness. However hard the situation was, whether it was political or moral, he struggled for his ideal of beauty and goodness under arms of humor. Don Quixote is a strong ideal figure of romantic mind. He reappears as a hope of unconquerable soul in such works as *Man of La Mancha* or G. Greene’s *Monsignor Quixote* afterwards.